

## 想像した感情に及ぼす比喩の影響：比喩機能の観点から

鎌田, 智史  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15717>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.93-99, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 想像した感情に及ぼす比喩の影響

## —比喩機能の観点から—

鎌田 智史 九州大学大学院人間環境学府

### The influence of metaphor on imagined emotions — From the perspective of metaphor functions —

Satoshi Kamada (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

A questionnaire investigating the use of metaphor in expressing imagined emotions was administered to 136 undergraduate students. Five categories of metaphor function were identified in this research - Transmission, Image, Play, Specification, and Indirectness. In compiling the results of this study I have created a scale to show the metaphor function and its relationship to the expression of emotions, in particular sadness and happiness, before and after the use of metaphor. T-tests were used to compare two groups, the strength of emotion before metaphor is expressed, and the effect of metaphor on imagined emotions. It was found that as for sadness Image and as for happiness Transmission do not work for the strong emotion than the weak emotion. Furthermore, in regard to the effect of metaphor on imagined emotions, the results showed that Image and Transmission strengthen sad emotions, and Image and Specification strengthen happy emotions. In conclusion, this study showed that different emotions are affected in different ways with different metaphor functions.

**Keywords:** metaphor, metaphor functions, imagined emotions

## 1 問題

私達は常日頃から感情を感じている。感情は主観的な体験であり、その経験をまとまりのあるものとして自分の中におさめることや、文字通りの言葉づかいだけでは伝えることが難しい場合がある。その結果、感情をうまく抱えることができず、経験が整理できないこともある。その理解と表出を促進させる方法の1つに比喩<sup>1)</sup>が考えられる。

比喩研究は、様々な分野で行われてきた。比喩による意味変化についてもレトリック研究から、メタファーなどの作用が述べられている(辻, 2002)。臨床の分野でも、事例的な研究から比喩使用の治療的意義も述べられている(Barker, 1985; Spence, 1987)。北山(1988)は、比喩とは、分かりにくいものや生臭いものを、あからさまに言うならば差障りのあるものを、そこに置いたまま、または曖昧にしたまま、間接化しながら何かを指し示そうとする表現方法であると述べている。また、治療経過から妙木(2005)は、「ばらばら」になりやすいものを

寄せ集めるといふ働きと同時に、というよりもそれを超えて、「ばらばら」のものの中にある「意味」をそれぞれ選り分け、有機的に結びつけるという働きを、メタファーの「意味を言葉に有機的に織り込む行為である」と述べている。さらに精神分析の転移解釈とは、比喩の発見と使用を代表する言語活動であるとも述べており、比喩の理解を深めることは臨床の分野でも意義があるだろう。

ところで、比喩には比喩機能がある。比喩機能の分類について、これまでにいくつか考察されている。渡辺(1992)は言葉を重視した治療の場に限定した考察で、細かく比喩機能を小項目ごとに分類し、「明確化」、「ネーミング」、「リフレイミング」、「婉曲表現」、「曖昧(両義的・多義的)表現」、「逆説」、「ジョーク」、「遊び」、「創造的表現」、「転移」、「退行」をあげている。田畑(1987)は、こころにことばを与えることは、こころの働きにかたちを与え、意味を与え、明瞭なものへと造形することと考えている(「明示性」)。楠見(1995)は、抽象概念は喩えられることによって実体化され、イメージが浮かびやすくなり、操作したり変形したりすることが容易になるという(「イメージ性」)。北山(1988)は生々しいものを指し示す言葉を、つまり、そのまま口にするならば「身も蓋もない」ことになるものを、比喩として使用することによって、蓋によって覆われた身(意味内容)と、その身を覆う蓋(記号表面)との間に距離

<sup>1)</sup> Barker (1985) を参照して以下のように比喩を定義した  
①複雑な状況を、包括的に扱うことを目的に作られた本格的な物語  
②特定の限定された目標を達成することを狙いとする逸話や短い物語  
③特定の事項を説明したり、強調したりするためのアナロジー、シミリー(直喩)、短いメタファーとしての言葉  
④関係性のメタファー

を創造していると述べている（「間接性」）。吉田（1996）は、比喩的表現の「間接性」によって比喩で伝えることでずっと具体的に気持ちが伝わり（「伝達性」）、「遊戯性」という機能は、我々の感情や感性に影響を与えるという効果をも生み出していると述べ、比喩の使用が、感情に影響を与えることを示唆している。また、新しい形の表現は新たな感覚を呼び覚まし、その感覚は新しい経験を生み出すと述べられている（古岩井，1999）ように、感情と比喩の関連について、これまでにいくつか検討されているが、比喩機能の観点から感情との関連については検討されていない。ここで比喩機能とは、文字通りのことを比喩で表現することによって、個人の中になんらかの変化を生じさせる比喩の働きと定義し、本研究では感情を比喩で表現する際に働く機能に焦点を当てることにする。

以上のように比喩を使用することで様々な比喩機能が働くことが述べられているが、研究者によって様々であることや、伝達性の中に間接化が含まれていたり、伝達性と遊戯性が繋がっていたりと比喩機能の分類は不明瞭であるため、比喩機能分類の検討について十分になされているとは言えない。そのため、比喩機能と感情の関連を検討する実証研究の必要性があると言える。

## II 目的

本研究では、第一の目的として、自由記述による予備調査と先行研究を参考にして、比喩機能尺度を作成し、想像した感情を比喩で表現することで働く比喩機能を分類することにする。その際、否定的感情と肯定的感情からそれぞれ悲しい感情と嬉しい感情の2種類の感情を取り出し、比較検討する。また吉良（2002）は、強い情緒を感じている時には、われわれはその情緒のまっただ中にあり、それを客体として対象化して眺めることは難しいと述べていることから、第二の目的として、表現する前の感情の強さと比喩機能の働きの関連について検討する。さらに、想像したそれぞれの感情に対して、比喩機能がどのように影響を及ぼしているかについて、比喩使用後の感情の強弱の変化の視点から検討する。

## III 方法

### 1. 予備調査

大学生15名を対象に、比喩を使用したときにどのような機能や効果があると思うかを自由記述により尋ね、予備調査を行った。対象者の回答から、2名の判定者の協議によって、26項目が作成され、先行研究から作成した19項目を合わせて、45項目作成した。それらの項目について、筆者と2名の臨床系大学院生で内容的妥当性を検

討した結果、同様な表現であった2項目を削除し、43項目の比喩機能尺度を作成した。調査項目は、本調査において記述した。

## 2. 本調査

### 1. 調査時期

2002年11月—12月

### 2. 調査対象

大学生に質問紙調査を行った。分析対象者は、調査に回答した学生（男性72名、女性64名）計136名、平均年齢22.34歳（ $SD=1.83$ ）であった。

### 3. 質問紙構成

(a)想像した感情の強さ：大学生が想像しやすいと考える悲しい状況を、筆者を含む大学院生3名で検討し、4場面を設定。“その他”として対象者が想像しやすい状況があれば記述してもらおうという選択肢の計5つの中から選択して、十分に想像してもらった。その後、比喩で表現する前の悲しい感情の強さを「1.全く悲しくない」から「7.非常に悲しい」の7件法。(b)感情を比喩で表現：「とても悲しくなりました」の部分を比喩で記述してもらった。(c)比喩機能尺度：予備調査により作成した、43項目からなる尺度を用いて「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」の5件法。(d)比喩使用後の感情の強さ：比喩の記述後に、感情の変化の程度を「1.弱くなった」から「5.強くなった」の5件法。

同様に嬉しい感情についても(a)から(d)の回答を求めた。また質問紙作成において、悲しい—嬉しいの順番と、嬉しい—悲しいの順番の2種類を作成し、カウンターバランスを行った。

以上の内容からなる質問紙を個別に配布し、後日回収するという方法で質問紙調査を実施した。

## IV 結果

### 1. 比喩機能の分類

想像した悲しい状況の比喩機能尺度43項目に対して、因子分析（主因子法、エカマックス回転）を行なった。その際、スクリープロットと累積説明率を元に最初に3因子から11因子までを想定し、共通して因子負荷量.35以下である項目から順に除き、回転させるという作業を重ね、5因子33項目を得た。全体の固有値は1.46以上であった。このとき5因子による累積説明率は50.51%であった（Table 1）。第1因子は“自分の気持ちを十分に表現してくれたと思った”、“自分の気持ちを簡潔に表現してくれたと思った”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、他者への表現について感じた効果を表していると解釈されるため「伝達性」と命名した。第2因子は“イメージとして伝えやすいと思った”、

**Table 1**  
想像した悲しい状況の比喩機能尺度の因子分析結果（主因子法，エカマックス回転）（ $N=136$ ）

項目内容	I	II	III	IV	V	共通性
<b>第I因子：伝達性（<math>\alpha=.88</math>）</b>						
自分の気持ちを十分に表現してくれたと思った	<b>.72</b>	.15	.20	.39	.03	.73
自分の気持ちを簡潔に表現してくれたと思った	<b>.70</b>	.23	.14	.14	.06	.59
自分の気持ちを適切に表現できた	<b>.68</b>	.25	.02	.41	-.08	.71
自分の気持ちにピッタリの言葉が見つかったと思った	<b>.66</b>	.31	.15	.33	.04	.66
その状況を話すより、たとえたことを話すほうが楽だと感じた	<b>.56</b>	.30	.20	.04	.05	.45
<b>第II因子：イメージ性（<math>\alpha=.84</math>）</b>						
イメージとして伝えやすいと思った	.29	<b>.76</b>	.03	.00	-.01	.66
イメージが浮かびやすくなった	.03	<b>.61</b>	.06	.34	.03	.49
その悲しい感情の度合いを感覚として伝えることができた	.30	<b>.58</b>	.07	.19	.14	.49
比喩が自分の気持ちをより捉えることができると思った	.28	<b>.53</b>	.03	.33	.19	.50
言いたいことが強調できた	.39	<b>.51</b>	.10	.33	-.01	.52
他人に分かりやすく伝えることができた	.32	<b>.47</b>	.14	.30	.07	.44
状況がイメージでき、想像がふくらんだ	.22	<b>.40</b>	.26	.17	.22	.36
<b>第III因子：遊戯性（<math>\alpha=.83</math>）</b>						
話が広がると思った	.10	-.02	<b>.75</b>	.36	.03	.71
リズムカルになったと思った	.06	.14	<b>.63</b>	.05	.23	.48
話をおもしろくできると思った	.04	-.05	<b>.61</b>	-.05	.23	.44
風情がでたと感じた	.15	.08	<b>.58</b>	.02	.07	.37
うまい表現ができたなど自分で感心した	.51	-.01	<b>.56</b>	.05	.16	.60
新しい考えが思い浮かんだ	.07	.08	<b>.55</b>	-.07	.43	.50
連想がふくらんだ	.14	.19	<b>.52</b>	.18	.10	.37
<b>第IV因子：明示性（<math>\alpha=.82</math>）</b>						
状況を自分の中で確認することができた	.22	.24	.02	<b>.59</b>	.31	.55
その状況がはっきりとイメージできた	.18	.44	.06	<b>.57</b>	-.03	.56
悲しいという感情が具体的になった	.14	.38	.00	<b>.55</b>	-.03	.46
その状況を頭の隅に置いておくことができるようになった	.21	.02	.08	<b>.49</b>	.37	.43
以前と比べて、その状況を受け入れることができたと思った	.20	.00	.38	<b>.45</b>	.18	.42
実際にその状況にあるような気持ちになりやすいと感じた	.31	.40	-.07	<b>.44</b>	.01	.46
伝えられることが増えたと思った	.20	.32	.25	<b>.40</b>	.05	.37
あいまいな状況のイメージが明確になった	.23	.31	.18	<b>.38</b>	.19	.36
<b>第V因子：間接性（<math>\alpha=.78</math>）</b>						
自分のことを客観的にみることができた	-.06	.05	.13	.08	<b>.74</b>	.58
その状況について以前より落ち着いてみるできるようになった	.10	-.08	.10	.31	<b>.63</b>	.52
少し離れたところからその状況を見ることができた	-.14	.15	.11	.04	<b>.60</b>	.42
なんだかすっきりした	.35	.06	.31	-.09	<b>.56</b>	.54
自分の中でその状況についての考えをまとめることができた	.15	.36	-.02	.32	<b>.54</b>	.54
ゆったりとした気分になった	.00	-.12	.31	-.07	<b>.52</b>	.39
二乗和	3.64	3.53	3.28	3.25	2.96	16.67
寄与率	11.04	10.71	9.95	9.84	8.96	50.51

“イメージが浮かびやすくなった”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、想定する状況へのイメージが深まることを表していると解釈されるため「イメージ性」と命名した。第3因子は“リズムカルになったと思った”、“話をおもしろくできると思った”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内

容は、遊びが生じる傾向を表していると解釈されるため「遊戯性」と命名した。第4因子は“状況を自分の中で確認することができた”、“悲しいという感情が具体的に”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、状況について自分の中でより具体的にになり、明らかになることを表していると解釈されるため

**Table 2**  
想像した嬉しい状況の比喩機能尺度の因子分析結果（主因子法，エカマックス回転後）（ $N=135$ ）

項目内容	I	II	III	IV	V	共通性
<b>第I因子：イメージ性（<math>\alpha=.85</math>）</b>						
イメージが浮かびやすくなった	<b>.70</b>	.11	.31	.07	-.07	.61
状況がイメージでき、想像がふくらんだ	<b>.67</b>	.08	.21	.31	.12	.61
その状況がはっきりとイメージできた	<b>.67</b>	.14	.13	-.02	.14	.50
実際にその状況にあるような気持ちになりやすいと感じた	<b>.64</b>	-.02	.13	.21	-.06	.47
イメージとして伝えやすいと思った	<b>.58</b>	.30	.23	.20	-.14	.54
比喩が自分の気持ちをより捉えることができると思った	<b>.51</b>	.20	.37	.14	-.03	.45
その嬉しい感情の度合いを感覚として伝えることができた	<b>.47</b>	.27	-.14	.22	.05	.36
嬉しいという感情が具体的にになった	<b>.43</b>	.23	.42	-.13	-.04	.43
<b>第II因子：伝達性（<math>\alpha=.83</math>）</b>						
自分の気持ちを十分に表現してくれたと思った	.16	<b>.83</b>	.15	.07	-.02	.75
自分の気持ちにピッタリの言葉が見つかったと思った	.06	<b>.69</b>	.23	.21	-.02	.58
自分の気持ちを適切に表現できた	.27	<b>.65</b>	.17	.09	-.03	.53
自分の気持ちを簡潔に表現してくれたと思った	.03	<b>.61</b>	-.04	.14	-.09	.41
うまい表現ができたなと自分で感心した	-.06	<b>.55</b>	-.02	.49	.04	.55
<b>第III因子：明示性（<math>\alpha=.78</math>）</b>						
自分の中でその状況についての考えをまとめることができた	.24	-.03	<b>.60</b>	.09	.33	.54
その状況の今まで気づかなかった部分がみえてきた	-.06	.07	<b>.55</b>	.07	.24	.37
あいまいな状況のイメージが明確になった	.26	.25	<b>.52</b>	.22	.24	.50
状況を自分の中で確認することができた	.26	.06	<b>.51</b>	.02	.40	.50
伝えられることが増えたと思った	.26	.23	<b>.49</b>	.31	-.18	.49
新しい考えが思い浮かんだ	-.01	.05	<b>.44</b>	.40	.26	.42
<b>第IV因子：遊戯性（<math>\alpha=.76</math>）</b>						
話をおもしろくできると思った	-.05	.25	.07	<b>.70</b>	.05	.56
話が広がると思った	.16	.03	.23	<b>.66</b>	.01	.52
リズムカルになったと思った	.30	.27	-.05	<b>.49</b>	.11	.41
連想がふくらんだ	.18	.08	.42	<b>.47</b>	.25	.51
風情がでたと感じた	.22	.18	.05	<b>.43</b>	.26	.34
<b>第V因子：間接性（<math>\alpha=.76</math>）</b>						
自分のことを客観的にみることができた	.06	-.11	.13	.03	<b>.78</b>	.64
その状況について以前より落ち着いてみるようになった	-.03	.03	.16	.03	<b>.65</b>	.45
少し離れたところからその状況をみることができた	-.14	-.09	.04	.15	<b>.64</b>	.46
二乗和	3.38	2.89	2.58	2.51	2.15	13.50
寄与率	12.53	10.69	9.55	9.29	7.95	50.01

「明示性」と命名した。第5因子は“自分のことを客観的にみることができた”，“少し離れたところからその状況を見ることができた”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、感情が生じる状況から距離をとることを表しているため「間接性」と命名した。また、尺度の信頼性の指標として $\alpha$ 係数を算出したところ、「伝達性」が.88, 「イメージ性」が.84, 「遊戯性」が.83, 「明示性」が.82, 「間接性」が.78であった。このことから、各尺度の内的整合性は高く、ほぼ満足のいく水準であると言える。

同様に、想像した嬉しい状況の比喩機能尺度43項目に対して、欠損値のあった1人を除いた135人分のデータにより、因子分析（主因子法、エカマックス回転）を行なった。その際、スクリープロットと累積説明率を元に最初に3因子から11因子までを想定し、共通して因子負荷量.35以下である項目から順に除き、回転させるという作業を重ね、5因子27項目を得た。全体の固有値は1.39以上であった。このとき5因子による累積説明率は50.01%であった（Table 2）。第1因子は、“イメージが浮かびやすくなった”，“その状況がはっきりとイメージできた”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、想定する状況へのイメージが深まることを表していると解釈されるため「イメージ性」と命名した。第2因子は“自分の気持ちを十分に表現してくれたと思った”，“自分の気持ちを適切に表現できた”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、他者への表現の効果を表していると解釈されるため「伝

達性」と命名した。第3因子は，“自分の中でその状況についての考えをまとめることができた”，“その状況の今まで気づけなかった部分が見えてきた”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、状況について自分の中でより具体的になり、明らかになることを表していると解釈されるため「明示性」と命名した。第4因子は“話をおもしろくできると思った”，“話が広がると思った”，“リズムカルになったと思った”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、遊びが生じる傾向を表していると解釈されるため「遊戯性」と命名した。第5因子は“自分のことを客観的にみることができた”，“少し離れたところからその状況を見ることができた”などの項目に因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、感情が生じる状況から距離をとってその状況を見ることができると解釈されるため「間接性」と命名した。また、尺度の信頼性の指標として $\alpha$ 係数を算出したところ、「イメージ性」が.85, 「伝達性」が.83, 「明示性」が.78, 「遊戯性」が.76, 「間接性」が.76であった。このことから、各尺度の内的整合性は高く、ほぼ満足のいく水準であると言える。

## 2. 比喩使用前の感情の強さと比喩機能の関連

比喩機能への比喩で表現する前の感情の強さの影響を検討するために、情緒のまった中にあると考えられる最も感情が強い、「非常に強く感じている」の7点をHigh群、それに対して比較的弱く感じている6点以下をLow群に分類した（以下、L/H群）。そして、表現

**Table 3**  
想像した悲しい感情と嬉しい感情の高低（L/H群）による感情の変化の比較（*t*検定）

		悲しい感情			嬉しい感情		
		High (N=61)	Low (N=75)	<i>t</i> 値	High (N=47)	Low (N=88)	<i>t</i> 値
伝達性	<i>M</i>	-0.04	0.04	.51 <i>ns</i>	-0.12	0.23	2.11 *
	<i>SD</i>	.89	.93		.90	.92	
イメージ性	<i>M</i>	-0.18	0.22	2.58 *	-0.10	0.18	1.72 †
	<i>SD</i>	.88	.88		.91	.88	
遊戯性	<i>M</i>	0.03	-0.04	-.47 <i>ns</i>	-0.01	0.02	.24 <i>ns</i>
	<i>SD</i>	.90	.93		.89	.88	
明示性	<i>M</i>	-0.07	0.08	1.01 <i>ns</i>	0.10	-0.19	-1.86 †
	<i>SD</i>	.96	.76		.84	.86	
間接性	<i>M</i>	0.10	-0.12	-1.41 <i>ns</i>	0.07	-0.13	-1.25 <i>ns</i>
	<i>SD</i>	.93	.88		.86	.94	

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$

**Table 4**  
感情の変化を目的変数とした比喩機能別の  
重回帰分析の結果

	悲しい感情 ( <i>N</i> =136)	嬉しい感情 ( <i>N</i> =135)
伝達性	.10	.38 **
イメージ性	.31 **	.38 **
遊戯性	-.11	.10
明示性	.34 **	.10
間接性	-.04	-.03
説明率 ( <i>R</i> <sup>2</sup> )	.24	.31

a) 表中の数値は標準偏回帰係数 $\beta$ である。

b) \*\* $p < .01$

前の感情の強さ L/H 群を独立変数、比喩機能の因子得点を従属変数とした *t* 検定をそれぞれ行った (Table 3)。その結果、悲しい感情では「イメージ性」について、H 群が L 群よりも有意に低いことが示された ( $t(134) = 2.58, p < .05$ ) が、その他の比喩機能では有意差は示されなかった。同様に、嬉しい感情についても *t* 検定を行った結果、「伝達性」について、H 群が L 群よりも有意に低いことが示された ( $t(133) = 2.11, p < .05$ )。また「イメージ性」では有意傾向を示し ( $t(133) = 1.72, p < .10$ )、H 群が低い傾向にあり、一方「明示性」では、H 群が高い傾向にあることが確認された ( $t(133) = -1.86, p < .10$ )。

### 3. 比喩機能と比喩使用後の感情の変化の関連

比喩使用後の感情の変化への比喩機能の影響力を比較するため、従属変数を悲しい感情の変化と嬉しい感情の変化の得点とし、比喩機能を独立変数として強制投入法による重回帰分析をそれぞれ施した (Table 4)。その結果、比喩機能と悲しい感情の変化の関係については、感情の変化は、「イメージ性」( $\beta = .31, p < .01$ ) と「明示性」( $\beta = .34, p < .01$ ) から正の影響を受けている。一方、比喩機能と嬉しい感情の変化の関係については、感情の変化は、「イメージ性」( $\beta = .38, p < .01$ ) と「伝達性」( $\beta = .38, p < .01$ ) から正の影響を受けていることが示された。

## V 考 察

### 1. 比喩機能の分類

今回対象とした悲しい感情と嬉しい感情のそれぞれの感情についての因子分析の結果、因子負荷量は全く同じではなく、抽出された下位項目は少数であるが異なった。しかし、悲しい感情と嬉しい感情ともに「伝達性」「イ

メージ性」「遊戯性」「明示性」「間接性」の5つの因子に分類された。これらの因子、つまり比喩機能は、先行研究で挙げられていたものの中に含まれることが確認され、先行研究を支持していることが実証的にも示された。さらに本研究では、感情は、肯定的か否定的かということに関わらず、想像した感情を比喩で表現することで働く比喩機能は、同じ5つにまとめられることが確認された。

### 2. 比喩使用前の感情の強さと比喩機能の関連

比喩使用前の悲しい感情がより強い群は弱い群よりも、「イメージ性」が働いていない傾向が示唆された。このことから、想像した時点で悲しい感情が強いことによってイメージがふくらみにくいと考えられる。これは、否定的感情を表出する際には多かれ少なかれ心理的抵抗が生じると述べられている (松石, 2001) ように、比喩にすることで悲しい感情を感じることに対して抵抗が生じ、イメージすることが抑えられているのではないかと考えられる。また嬉しい感情では、比喩で表現する前の嬉しい感情のより弱い群は強い群に対して、「伝達性」が働いていることが確認された。この結果は、想像した時点で嬉しい感情が弱いことで、比喩によって感情を捉え、相手により表現できると感じやすい一方、強い感情を比喩で十分に表現することは難しいと感じているのではないかと考えられる。そのため、両感情ともに表現前の感情が非常に強いことで、悲しい感情では「イメージ性」、嬉しい感情では「伝達性」が働きにくいのではないかと考えられる。これらの傾向は、吉良 (2002) の指摘とほぼ一致すると言える。ただし、悲しい感情においては「伝達性」「遊戯性」「明示性」「間接性」、嬉しい感情では「遊戯性」「間接性」の働きは、想像した感情を比喩で表現する前の強さにあまり影響を受けないようであり、他の要因によって比喩機能は影響を受けているのではないかと推測される。

また強い嬉しい感情では、「伝達性」が働く必要性がなく、文字通りのことばで十分であると感じているかもしれない。さらに、嬉しい感情において「明示性」は比喩表現前の感情が強いことで、より状況について考えがまとまり、気づかない部分が見えてくるといった傾向も確認されたため、感情が強いことで働く機能についても、今後検討していく必要があるだろう。以上のように、それぞれの感情の種類によって、比喩の働き方が異なることが示された。

### 3. 比喩機能と比喩使用後の感情の変化の関連

想像した悲しい感情において「イメージ性」「明示性」は、感情を強める方向に影響を持つことが明らかとなった。つまり、比喩を使用することによってイメージが浮

かびやすくなってイメージがふくらみ、悲しい感情をより理解することができるようになり、悲しみが強くなったと考えられる。また状況を自分の中で確認することができ、悲しいという感情が具体的に変わったことで、悲しい感情が強くなったのではないかと推測される。嬉しい感情においては「イメージ性」「伝達性」は感情を強める方向に影響を持つことが明らかとなった。つまり比喩使用後は、イメージが浮かびやすくなって、想像がふくらみ感情が強まったのではないかと考えられる。そして、自分の気持ちを十分に表現してくれたと感じ、相手に自分の気持ちをより伝えることができたと感じたことで、嬉しい感情が強くなったのではないかと考えられる。

それとは逆に、悲しい感情での「伝達性」と嬉しい感情での「明示性」の感情の変化への働きは示されなかった。この結果は、感情の向かう方向性について、喜びは外に向かっている解放であり、悲しみは自我の中心へ向かう方向であると述べられているが（田畑, 1987）、感情を比喩で表現することで、悲しい感情では「明示性」の働き、つまり内への方向であり、嬉しい感情では「伝達性」が働き、つまり外への方向に働いていると考えられ、今回の結果は田畑の示唆を支持すると言える。

一方、「イメージ性」はそれぞれの感情に対して感情を強める働きをしている結果を得た。これは、今回比喩表現の対象とした感情が想像した感情であったことと関係しているのではないかと推測される。そのため今後、例えば比喩表現の対象を実際に経験した状況での感情とした検討を行い、「イメージ性」についての理解を深める必要があるだろう。

また結果により、両感情において「遊戯性」「間接性」は、感情の強弱の変化に影響を及ぼさないことが明らかになった。そのため、感情の変化以外の視点より、詳細な分析が必要であると考えられる。

## VI まとめと今後の課題

本研究の目的は、比喩機能尺度の作成と、比喩機能と想像した感情との関連を検討し、比喩機能について理解を深めることであった。想像した2種類の感情を比喩で表現した時に、両感情ともに5つの比喩機能が確認された。また、比喩表現前の感情の種類と強さによっても働く比喩機能が異なり、さらに比喩使用後の感情の変化と比喩機能の関連では、悲しい感情と嬉しい感情では感情を強める比喩機能が異なることが示された。比喩と感情の関連について、比喩機能の観点から理解することで、より詳細な示唆が得られた。

最後に本研究の課題を2点述べる。一つは、心理面接におけるメタファーの意義として田邊（2002）は、「間接性」、「明示性」、「創造性」の3つをあげ、その中でも、

「間接性」を基本と考え、「明示性」と「創造性」はその後に続くものであると述べており、それぞれの比喩機能の中でも働く順番など、異なることが推測されるため、比喩機能の相互作用について検討する必要があるだろう。もう一つは、比喩で表現する対象を、実際に経験した過去の感情とし、感情と比喩機能の関係について分析することによって、臨床研究の基礎研究として、有用なものとなるであろう。

## 付記

本論文をまとめるにあたり、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授北山修先生、同教授吉良安之先生に深く感謝申し上げます。

## 文献

- Barker, P. (1985). *Using Metaphors in Psychotherapy*. New York: Brunner/Mazel. (バーカーP. 堀恵・石川元 (訳) (1996). 精神療法におけるメタファー 金剛出版)
- 吉良安之 (2002). 主体感覚の賦活化 九州大学出版会
- 北山 修 (1988). 心の消化と排出 創元社
- 古岩井嘉蓉子 (1999). 言語が創造するもの—小学生の比喩表現をめぐって— 神奈川大学言語研究, **22**, 107-130.
- 楠見 孝 (1995). 比喩の処理過程の意味構造 風間書房
- 松石佳奈 (2001). 感情表現における比喩の役割について 九州大学大学院人間環境学府修士論文
- 妙木浩之 (2005). メタファーの発見と使用 精神分析における言葉の活用 金剛出版
- Spence, P. D. (1987). *The Freudian Metaphor: Toward Paradigm Change in Psychoanalysis*, New York: W.Norton & Company (ドナルド P.スペンズ 妙木浩之 (訳) (1992). フロイトのメタファー 産業図書)
- 田畑博敏 (1987). 言語・メタファー・こころ 鳥取大学教養部紀要, **21**, 23-48.
- 田邊敏明 (2002). 心理面接におけるメタファーの役割 山口大学心理臨床研究, **2**, 23-35.
- 辻 幸夫 (2002). メタファーの基本用語 月刊言語 大修館書店, 31, 24-25.
- 渡辺智英夫 (1992). 技法としての比喩 北山修 (編) ことばの心理学 日常臨床語辞典 青土社
- 吉田一栄 (1996). メタファーの機能—その伝達性と遊戯性と創造性について— 比較文化研究, **31**, 35-40.